

高校英語授業を 知的にしたい

.....
内容理解・表面的会話中心の授業を超えて

三浦 孝 巨理 陽一
山本 孝次 柳田 綾 編著

研究社

目 次

第 I 部 総論：知性を育てる英語授業の原則

第 1 章 英文の内容理解だけに終始する英語授業をどう脱却するか——知性を育てる英語授業の 8 つの原則	2
..... (三浦 孝)	2
1. はじめに.....	2
2. 英文の内容を理解するだけの英語授業でよいのか.....	3
3. 内容理解の先に、批判的検討や意見交換がある授業を.....	4
4. 学習指導要領も強調する、英語で議論できる教育の必要.....	5
5. 本書の独自性.....	6
6. 知的・論理的英語力を育てる 8 つの指導原則.....	7

第 II 部 知性を育てる英語授業の実践編

第 2 章 グラフィック・オーガナイザーを用いた内容理解活動の実践	12
..... (三浦 孝)	12
1. 筆者の自己紹介と実践にあたっての問題意識.....	12
2. 授業の設計.....	12
2.1 授業実践の枠組み.....	12
2.2 授業のシラバス.....	15
2.3 使用テキスト.....	17
2.3.1 自主編成テキストを使う理由.....	17
2.3.2 テキストの構成.....	17
3. 毎回の授業の内容の推移.....	19
3.1 開始期の授業内容.....	19
3.2 中盤期の授業内容.....	21
3.3 終盤期の授業内容.....	22
4. 成績評価方法.....	23

5. 実践の結果.....	23
---------------	----

第3章 テキストを深く読むクリティカル・リーディングの授業

..... (伊佐地恒久)	34
1. 実践にあたっての問題意識.....	34
2. 授業実践.....	35
2.1 授業の枠組み.....	35
2.2 教材.....	36
2.3 授業の概要.....	37
2.4 本時テキストについて.....	47
2.5 学生作品.....	47
2.5.1 学生によるクリティカル・リーディング・クエス ションの例.....	47
2.5.2 学生による意見文の例.....	48
3. 指導効果の検証.....	50
3.1 調査材料.....	50
3.2 批判的思考力への効果.....	50
3.3 批判的思考態度への効果.....	51
3.4 授業アンケート結果から.....	52
4. 結論.....	55

第4章 英語が苦手な学生が2分間スピーチを楽しむようになる まで——自作カルタで伝え合う力と関係性を育てる

..... (永倉由里)	60
1. 筆者の自己紹介と実践にあたっての問題意識.....	60
2. 授業実践の目標.....	61
3. 授業の設計.....	62
4. 授業実践例.....	63
4.1 「関係」を育てる Icebreaking ——Magical Quiz (≒ Who am I?).....	64
4.2 「柔らかい構え」をもたらすリズム音読.....	65

4.3 「滑舌」向上！ 口の周りの筋肉トレーニング ——Shadowing Quiz.....	65
4.4 英語表現リストで Look up & Say	66
4.5 「記憶」を助けるカルタ活動.....	67
4.6 Magical Quiz.....	69
4.7 スキーマ（背景知識）を活性化させるカルタ活動	69
4.8 カルタを使って口の周りの筋肉トレーニング.....	71
4.9 「即時的な判断」を求めるカルタ活動 ～即答バトル～	71
4.10 スポーツの「意義」を考える Brainstorming 活動	72
4.11 モノローグに挑戦！——1-Minute Monologue.....	73
4.12 フリートークに挑戦！——2-Minute Dialogue	73
4.13 定番タスク 2 種——Bingo と Find who...	74
4.14 機会を与え、楽しさを共有したいミニ・スピーチ	78
4.15 振り返りシート「Learning Journal」で自律学習者への 成長を促す	82
5. 対象学生の授業観と動機づけの変容	84

第 5 章 生徒が身を乗り出してくるタスクで旧来型教科書の限 界を超える——心を動かす授業をめざして.....（柳田 綾）	89
1. 筆者の自己紹介と実践にあたっての問題意識.....	89
1.1 自己紹介.....	89
1.2 実践にあたっての問題意識.....	89
2. これまでの実践の課題と授業の目標	90
2.1 実践にあたっての問題点.....	90
2.2 授業で追求した目標	91
3. 授業の設計.....	92
3.1 対象クラスの概要	92
3.2 実践期間.....	92
3.3 使用教材.....	92
3.4 年間指導計画表（シラバス）.....	92
3.5 本実践の指導計画	95
3.5.1 本課の目的	95

3.5.2 本課の指導計画表.....	96
4. 実践の足跡.....	98
4.1 遭遇した困難点・解決方法.....	98
4.2 達成できた点.....	99
4.3 本実践を通して発見できたこと.....	100
4.3.1 年間指導計画(シラバス)の重要性.....	100
4.3.2 文法を context で使用することの重要性.....	100
4.3.3 peer-editing の効果.....	101
4.3.4 learning community の構築.....	101
4.4 今後改善すべき点.....	102
5. まとめ:「生き方が見えてくる英語授業」に私が提案できること.....	102
5.1 頂上タスクの設定(原則3).....	103
5.2 生徒が感想・意見・疑問・対案等を出す授業(原則4, 5)	104
5.3 学びの共同体, 社会性の育成, 自律的学習の推進 (指導原則6).....	105
5.4 試行錯誤を楽しむ.....	106
5.5 approach(教育哲学)を再確認する.....	106
第6章 思考力育成へ向けた授業実践——エマ・ワトソンの HeForShe スピーチを題材として.....(山本孝次)	121
1. 実践にあたっての問題意識.....	121
2. 授業で追求した目標.....	123
3. 授業の設計.....	123
3.1 対象クラスの概要.....	123
3.2 実践期間.....	123
3.3 使用教材.....	124
3.4 指導計画表.....	125
4. 実践の足跡(授業記録).....	127
5. 実践のまとめ.....	150
5.1 この実践で目指した目標は, どの程度達成できたか.....	150
5.2 この教材および授業の良い点は何だと考えるか.....	152

5.3 今後の課題は何か.....	152
-------------------	-----

第7章 スティーブ・ジョブズと頂上タスクで批判的思考力を伸ばす(峯島道夫・今井理恵)	156
1. 筆者の自己紹介と実践にあたっての問題意識.....	156
2. 授業で追求した目標 ——批判的思考力育成のための「CTスキル目標」.....	157
3. 授業の設計.....	157
3.1 使用教材.....	157
3.2 指導の方策.....	158
4. 実践の足跡.....	160
4.1 高校での実践.....	160
4.1.1 実施時期と授業進度計画.....	160
4.1.2 練習課題.....	161
4.1.3 小タスク①.....	163
4.1.4 小タスク②.....	165
4.1.5 頂上タスク.....	167
4.2 大学での実践.....	169
4.2.1 実施時期および対象クラスの概要.....	169
4.2.2 授業進度計画(シラバス).....	170
4.2.3 ユニットの構成.....	172
4.2.4 第1話「練習課題」.....	173
4.2.5 第1話「小タスク」.....	175
4.2.6 第2話「練習課題」.....	178
4.2.7 第2話「小タスク」.....	179
4.2.8 第3話「練習課題」.....	181
4.2.9 頂上タスク.....	183
4.3 質問紙調査から見たもの.....	190
5. まとめ.....	192
6. 今後の課題.....	193
6.1 高校での実践の課題.....	193
6.2 大学での実践の課題.....	193

7. おわりに.....	194
第8章 小グループが英語で打ち合わせ、英語でプレゼンテーションできる指導——ネイティブ・スピーカーのグループ活動から学ぶ..... (加藤和美)	198
1. 筆者の自己紹介と実践にあたっての問題意識.....	198
2. 教材作成.....	199
3. 授業の構成.....	201
3.1 授業で追求した目標.....	201
3.2 小タスクから頂上タスクへと至る知的交換活動.....	202
4. 実践の足跡.....	213
4.1 授業実践 1——基本編.....	213
4.2 授業実践 2——応用編.....	215
5. 最後に.....	226
第III部 試作教材『Trinity English Series Book 1』を使った授業実践	
<hr/>	
第9章 『Trinity English Series Book 1』を使った高専での実践..... (種村綾子)	230
1. 筆者の自己紹介と実践にあたっての問題意識.....	230
2. 授業で追求した目標.....	231
3. 授業の設計.....	231
3.1 対象クラスの概要.....	231
3.2 実践期間.....	232
3.3 使用教材.....	232
3.4 指導計画表.....	232
4. 実践の足跡(授業記録).....	234
5. 試用実践のまとめ.....	247
5.1 この試用で目指した目標は、どの程度達成できたか.....	247
5.2 この教材の良い点は何だと考えるか.....	248
5.3 今後の課題は何か.....	249

第 10 章 英語を通してより豊かに生きることにつながる授業	(鈴木章能) 253
1. 筆者の自己紹介と実践にあたっての問題意識	253
1.1 自己紹介	253
1.2 日本の英語教育におけるモチベーションの問題	255
1.3 日本の英語教育におけるモチベーションの問題をどう解決するか	256
2. 授業で追求した目標	256
3. 授業の設計	257
3.1 対象クラスの概要と授業実践の概要	257
4. 実践の足跡	260
5. 学生の「生きる喜びを見出せる英語学習」とは	276
6. まとめ:「生き方が見えてくる英語授業」に私が提案できること	281

第 IV 部 大学入試とこれからの英語授業

第 11 章 これからの大学入試が求める英語力	
—問題発見・判断・意思決定・解決の力	(亙理陽一) 286
1. はじめに	286
2. 大学入試における英語試験の政策動向	287
2.1 経緯と変容	287
2.2 これから求められる力	289
3. 高校側の受け止め方	291
第 12 章 現代の大学入試問題はどのような英語力を試そうとしているか—全国 33 校 91 種類の入試分析から言えること	(関 静乃・亙理陽一) 294
1. 研究の動機	294
2. 研究の方法	295
2.1 分析対象校	295
2.2 分析項目	295
2.3 A 型問題の定義と典型例	297

2.4 B型問題の定義と典型例.....	298
2.5 O型問題の研究方法与典型例.....	303
3. 分析結果と考察.....	307
3.1 問題文の語数増加の傾向.....	308
3.2 A型問題・B型問題の割合.....	308
3.3 B型問題の特徴.....	309
3.4 B型問題の広がりと言数との相関.....	310
3.5 O型問題の特徴.....	311
4. まとめと展望.....	313
あとがき.....	317
執筆者一覧.....	318
索引.....	319

第 I 部

総論：知性を育てる英語授業の原則

第1章

英文の内容理解だけに終始する英語授業を どう脱却するか

——知性を育てる英語授業の8つの原則——

三浦 孝
(静岡大学名誉教授)

1. はじめに

日本人の大部分が英語を使うことが苦手だということは、長年にわたって指摘されてきており、中でも英語で自分の意見を主張したり議論することが苦手だと言われている。筆者も海外の語学研修プログラムの引率や国際的学会に参加してきたが、その狭い経験からも、これには同感である。学校英語教育を受けてきた本人はもとより、産業界も外交筋も文部科学省も、日本人の議論下手を大きな障壁として憂慮し、英語で議論できるようにする教育の必要を訴えてきている。

しかし、英語で議論できる教育を、日本の中学・高校・大学の英語授業で、実際に実現したケースはあまり報告されていない。多少あるにはあるが、それは英語科という専門科での「ディベート」の授業や、Super Global High Schoolのような研究指定校での特設授業が主である。あるいは、ディベートの指導に造詣の深い教師が、年間の授業の中の数時間を使って、教科書を離れてディスカッションやディベートに特化したプロジェクト的取り組みを行ったケースはある。だが、こうした取り組みは普通の授業とは切り離されたところにある。

この日常的英語授業とディベート的英語授業との乖離は、どうしたら埋められるだろうか。そもそも英語で議論できる人間を育てようとして、必ずしもディベートという形式にこだわる必要はないのではないか。ディベートというのは、議論（ディスカッション）の中のある特殊な一形式である。それは、「言葉のバトル」とも言われるように、対立する二派に分かれて、互いが相手を打ち負かそうとして言い争う活動である。雰囲気的和合を尊重し、異

論を唱えることを嫌う日本人学習者に英語での議論を教えようとして、いきなり学習者をこのような戦いのリングに立たせることには無理がありはしないか。それではどうしたらよいかと言えば、答えは明瞭である。ディベートという形式にこだわらず、普段の英語授業の中で、教材の内容について意見や質問を出し合えばよいのである。本書はその筋道を明らかにしようとしている。

なお本書は、「高校英語授業を知的に」という書名を掲げながら、大学や短大での実践も収録している。それらの実践が、高校でも十分に活用可能であるという判断から、収録したものである。

2. 英文の内容を理解するだけの英語授業でよいのか

高校で言えば「コミュニケーション英語Ⅰ」や「コミュニケーション英語Ⅱ」といった、週当たりの授業時間数が3時間以上の主要科目で、英語で議論できる授業に取り組んでいるところはほとんどない。また大学で言えば、英語授業の中心を成す Reading の授業で内容に関する議論を取り入れている例はほとんど聞かない。もちろん大学の Conversation の授業では、日常的話題に関する議論は取り組まれてはいるが、こちらは扱う話題の平易さゆえに、知的・論理的議論とは呼び難いものが多い。要するに、高校や大学の英語教育のいわば「主食」にあたる授業で、英語で意見交換する力が、授業目標の中に取り入れられていない。

「コミュニケーション英語Ⅰ」のような、英語教育の中心を成す科目では、テキストの英文の内容を理解させることに全精力を使い果たしまっている傾向がある。こうした科目は授業目標を、「テキストの英文内容と文法事項の理解」に置き、その先に行こうとしていない。これは、我々の通常の「読む」行為からすると、まことに不自然である。いったい我々の中の誰が、記事を全部くまなく理解するために新聞を読んでいるだろうか？あるいはテレビのニュースを、自分の日本語聴解力を試すために全部理解しようとしているだろうか？本来、人間は何かの目的（たとえば求める情報を見つける）のために、文章を読んだり聴いているはずである。そういう目的があるからこそ、それにふさわしい読み方を選択し（たとえば斜め読み、拾い読み）、目的が果たされればそれ以上細かくその文章を読むことはしないのである。

3. 内容理解の先に、批判的検討や意見交換がある授業を

授業が、英文内容の理解でストップしてしまうことは、読みを不自然にするばかりでなく、読んだ内容に対する鈍感さを植え付け、生徒/学生の知性にとって有害な影響を及ぼしかねない。日本の生徒/学生が大学卒業までに受ける英語授業の時間を大まかに計算してみると、中学校3か年で410時間(週当たり授業4回として)、高校3か年で512時間(週当たり授業5回として)、大学で135時間(90分半期15回授業を6つとして)、合計で1057時間ほどになる。これだけ膨大な時間を、「次の英文を読み、本文の内容と一致する短文を、(a)～(e)から選びなさい」といった内容理解チェックに費やしているとしたら、はたしてどのような知性が育つだろうか。もちろん読んだ英文の中には、心を打つ名文や、知的啓蒙や示唆に富む英文も多々あるだろう。自分が受けた感動を、クラスで出し合い交流していたら、どんなに豊かな対話となることだろうか。しかし授業は内容理解が済むと、内容を味わう暇もなく次の英文に移ってしまう。また、読んだ英文の中には、読む値打ちのない駄文や、常識から言っておかしな英文も多々あるだろう。「この根拠でこの結論を導くのは論理的におかしいのではないか」「作者の論調は一方向的ではないだろうか」等々、違和感や疑念を感じることもあるだろう。しかし授業はそうした疑念には目もくれずに、内容理解チェックが済んだら次の英文に移ってゆく。こんなことを繰り返すうちに、学習者は英文を、自分の人生や問題意識とは関係のないものとして扱うようになってしまう。

現行指導要領の「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」のように、週に3～4回授業があり、「環境問題」「人権」「異文化理解」「世界の貧富の差」といった知的なテーマの英文を、同じクラスの生徒たちが一緒になって読み込んでゆく授業は、内容面でも言語面でも、英語を使って議論するための絶好の共通土俵を提供している。ところが生徒と教師にとってこうした絶好の議論の土壌が、みすみすと見捨てられてゆく。これだけ知性と社会性を軽視しておいて(クラス内で話し合うことは社会性育成の要である)、週1回程度の英語表現の授業で、「犬と猫と、ペットとしてどちらが好ましいか」などといった安直な議論の真似事をしたとしても、生徒はそんな白々しい議論に乗ってはこない。

さらに、英語授業における内容吟味の欠如は、実は一種の危険すらはらんでいる。それは、長期間にわたって英文を読み無批判に内容を受け入れる作

業を続けることによる、洗脳的効果である。現状のままの授業を続けていても、英語で議論できる日本人が育つことは望めない。

それではどうしたらよいか、本書の筆者たちは、普段の英語授業でこそ議論を取り入れるべきだと考え、5年前に「生き方が見えてくる高校英語授業改革プロジェクト」を立ち上げた。このプロジェクトは4か年にわたって活動し、その研究成果をプロジェクトのホームページに掲載してきた。そしてプロジェクトの完成段階の取り組みとして、高校・大学の普段の英語授業で、「議論できる日本人」を育てるメソッドの開発と試行研究を行った。そのまとめが、本書の内容である。

4. 学習指導要領も強調する、英語で議論できる教育の必要

まず初めに、議論できる英語力と現行の高等学校学習指導要領（2008年告示）との関係を考察しよう。

現行の高校学習指導要領が、それ以前のものでは取り上げていなかった新機軸は2つある。「英語の授業は英語で行うことを基本とする」¹と、「思考力・判断力・表現力の育成」である。このうち、前者は一部に本来の意図を外れて「授業中は日本語を一切排除すべし」という誤解を生みつつも、文部科学省が教科調査官や各県指導主事を通して、相当強力で講習・指導・点検を行っている。しかし同じく学習指導要領が強化のポイントとしている「思考力・判断力・表現力」の育成はあまり脚光を浴びていない。それどころか、その後に文部科学省が発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（2013）では、全く言及されておらず、忘れ去られてしまった感すらある。

授業を英語で行うことだけを強調し、思考力・判断力・表現力を育てることを軽視すれば、テキスト内容の comprehension check-up で埋め尽くされ機械的な授業に墮してしまう恐れがある。

こうした壁を、日本の英語教育はなかなか突破できてこなかった。そうした事態に危機感を感じた教師たちが集まって始めたのが「生き方が見えてくる高校英語授業改革プロジェクト」であり、その目的は英語授業の主食にあたる科目で、読んだ英文内容について生徒と生徒、生徒と教師が、議論を知的に楽しむための方法論を開発することであった。

5. 本書の独自性

本書の内容が従来の英語ディスカッション指導書と異なる点は：

1. ディスカッションやディベートといった、ある特定の活動形式から授業にアプローチするのではなく、あくまでも「主食」たる4技能統合的な授業で、教材の内容理解活動の先に、内容に関する意見交換を行うという、リーディングの自然な流れを尊重する。
2. 勝ち負けを争うバトルとしての議論ではなく、読んだ感想や疑問点をクラスメートと共有しあう、相互理解的なスタンスから議論を導入するので、自信のない生徒でも安心して意見が言える。
3. 紹介した指導法や教材は全て実際の学校現場で半年以上の試行を経て、日本の学校で機能しうることを検証済みのものとする。
4. 試行を行ったのは、必ずしも特別に英語教育に力点を置く学校やクラスでなく、普通の学校の普通のクラスである。
5. 目指す指導法は、傑出した個人の名人芸ではなく、明確な指導原則に則ったものとする。その原則さえ踏まえれば、誰でも実行可能な指導法である。
6. この研究が単なる現状批判に留まることなく、普通の学校の普通の授業で知性・論理力を高める授業が可能であることを証明するために、自主編成教材『Trinity English Series Book 1』（教材本体と指導書、ワークシートから成る）を作成した。これは、本書が提示する8つの指導原則（本章の6参照）を体現した教材である。さらに、実際にこの教材を使って授業を行った教師の試用体験報告を掲載し、その効果と今後の改善点を報告している（本書9・10章）。
7. 今後起こりうる英語大学入試の変化の動向を情勢分析し、高校側に必要とされると予測される対応を提言している（本書11章）。さらに現代の実際の大学入試英語問題で、知的・論理的英語力を試す問題がどれだけの割合を占めているか、具体的にどのような問題が出されているかについて、全国33大学の91種類の英語入試問題の詳細な分析に基づいた資料を提示している（本書12章）。

ここ数年の英語教育界は、「英語の授業は英語で行うことを基本とする」の文言のみに反応し、「使える」英語力を伸ばす技法にばかり目を奪われて、知

性を育てることを軽視している。本書はこのような状況に対して、知性・論理性を育てる具体的なプロセスと教材を提案しようとするものである。

6. 知的・論理的英語力を育てる8つの指導原則

本書は、高校・大学の普通の授業で知的・論理的英語力を育てるために、下記の8つの指導原則を提案している。

原則1: 繰り返し味わうに足る、内容・英文ともに豊かな教材を用いる。これは質的に高い英文を用いて、内容面から知的啓発をはかり、同時に生徒を優れた英文モデルに触れさせるためである(本書5・6・7・9・10章)。

原則2: グラフィック・オーガナイザー²を活用して、訳読以外の直読直解型の内容理解活動を行うとともに、推論発問や評価発問を用いてテキストのより深い理解を養う(本書2・3・7章)。

原則3: リスニングやリーディングの自己目的化を防ぎ、目的を持って聞く・読むという自然な聴解・読解を成立させるために、各単元に「頂上タスク³」を設ける。授業の諸活動は、その頂上タスクの達成のための下位タスクと位置づけ、頂上タスク達成のためにテキストを聞き・読む活動を展開する(本書3・4・5・6・7・8・9・10章)。

頂上タスクとは、たとえば次のようなものである:

- ・賛否両論を紹介した論説文を読んで、欠けている conclusion 部分を作成しなさい。
- ・生徒が各グループで不動産業を担当し、アパートのリストを見て、顧客の家族構成・収入・希望に合ったお勧めの物件ベスト3を選び、理由と共にクラスにプレゼンテーションし、クラスの投票で1位を選ぶ。
- ・物語“The Gift of the Magi”を読んで、生徒がもし物語の主人公だったら、相手にどのようなクリスマス・プレゼントを贈りたいかについて、まとまった英文に書いて発表しあう。

原則4: 聞き・読んだ物語文や記事について、生徒が感想や意見を出し合う。これは、ストーリーについて、自分の感激を伝えたい、クラスメートの気持ちを聞きたいという、生徒の自然な欲求に応えることであ

る。とりもなおさず、教材を深く咀嚼し、そこから何が学べるかを出し合う知的・対人的交渉のプロセスでもある。

たとえば、授業で読み終えた物語について、次のような質問をすることによって、このプロセスは容易に導入できる。

- ・ What do you think about this story? Would you recommend your friends to read it, or would you rather not?
- ・ Which sentences in this story do you like very much? And why?
- ・ What would you do if you were the hero/heroine of this story?
- ・ Pick up one of the main characters of this story and write a short letter to him/her.

(本書5・9・10章)

原則5: 扱った論説文について、生徒が疑問・意見・対案等を出し合うプロセスを設ける。生徒は、複雑で急変する現代社会を前にして、不安や疑問や問題意識をいっぱい抱えている。一つの論説文を読めば、読者として疑問や不審に思う点が必ずあるはずだし、またそうあるべきである。そうした「他の人はどう思っているのだろうか?」を授業に取り入れることで、critical thinking と社会性を養うことができる。たとえば、論説文の記述に関して、「これは事実を述べたものか、それとも推測や意見を述べたものか?」、「もし事実を述べているなら、それは一次情報か二次情報か?」「二次情報の場合、それを誰から入手したかが明記されているか」「観測や意見には十分な根拠や論拠が示されているか」「このテーマを扱う上で、必須の情報であるにもかかわらず欠落している情報はないか?」「利害が対立する問題についての意見では、それが誰の立場に立って書かれているか」などを出し合う活動である(本書3・4・5・6・7・9・10章)。

原則6: 教材に出てきた地名・人名・出来事等で興味を覚えた事柄について、生徒に調べ学習の機会を与えたり、同じ題材を扱った別のテキストと比較させて(これを「対置テキスト」と呼ぶ)、その結果をプレゼンテーションで発表しあい、学びの共同体、社会性育成、自律的学習の機会とする(本書5・6・7・10章)。

原則7: 意味ある課題を通して、重要文法事項を spiral 的に学べるようにする。特に、文中における主語と述語動詞の発見、照応関係や並行表

現を見分ける活動、段落構造 (Topic Sentence と Support) や段落間構成の見分けは、教材が変わっても一貫して指導できる学習タスクとして活用可能であり、継続発展的に指導することとする (本書 2・3・5・8・10 章)。

原則 8: 意見交流活動で生徒から発せられる感想・疑問・意見・対案等に対して、教師は常に中立的司会者として反応する。つまり、教師はどのような生徒の声も class discussion への貴重な contribution (貢献) として positive に受けとめ、考える材料としてクラスに還元し、それがさらなる discussion を生むように取り計らう。

教師はたとえ自分の意に反する意見や、愚かと思われる意見が出されても、「先生はそうは思わない!」「その意見はおかしい!」というふうに批判的な反応を取ることは控える。唯一教師が注意を与えるのは、暴力的や侮辱的な言葉遣い、他人の発言を妨害する行為に対してである。これは、教室の中に発言の自由を保障する鉄則である。我々が授業で目標とするのは、特定の意見に凝り固まることではなく、いろいろな意見に冷静に耳を傾ける姿勢だからである。

なお、先ほども述べたが、これらの 8 つの原則を実際に具現化した「教材 + 指導書 + ワークシート集」として、筆者らは高校用に『Trinity English Series』を 3 レベルで試作している。そのうちの Book 1 (英検 3 級程度対象) は、浜島書店のご厚意でサンプル版を無償製本して希望校に配布した。他の 2 レベルは、ホームページよりダウンロードして利用可能にしている (<http://homepage3.nifty.com/newmiurpage/shisakuban.html>)。

〈注〉

1. この文言の主旨は、「生徒がコミュニケーションの手段として英語を使う活動を授業の中心に据えよ」という意味であって、母語の使用を完全に否定したものではない (文部科学省, 2009, p. 44)。
2. Graphic Organizer とは、表 (table), 図式 (chart), フローチャート (flow-chart), ウェブ図 (web), 時系列 (timeline) 等を用いて、テキストの内容を視覚的に提示すること。Graphic Organizer は、テキストの段落内構成 (paragraph organization) や段落間構成 (intra-paragraph organization) の掌握力を養成するとともに、テキスト内容の骨子の記憶保持に役立つと報告されてい

る。特に、summary writing と併用するとさらに効果が高まると言われている。詳しくは三浦 (2014, pp. 132–146) 参照。

3. 授業で生徒が達成すべき creative な課題のことを「タスク」と呼び、1つの単元（普通は数回の授業で完了する）のすべてのタスクの頂点に立つ統合的なタスクを頂上タスクと呼ぶ。単元の最初から、頂上タスクを生徒に提示し、その達成を可能にするように毎回の授業を方向づけてゆく。

〈引用文献〉

- 永倉由里・伊佐地恒久（編）（2014）。「The Gift of the Magi」, 「ジョンとヨーコが描いた平和の世界を知ろう」『Trinity English Series Book 1』浜島書店（非売品）。
- 永倉由里・伊佐地恒久（編）（2014）.『Trinity English Series Book 1 指導書・ワークシート集』浜島書店（非売品）。
- 三浦孝（2014）.『英語授業への人間形成的アプローチ』研究社。
- 三浦孝・亙理陽一（編）（2014）.「The Message from Helen Keller」, 「Steve Jobs' Commencement Address at Stanford University」『Trinity English Series Book 3』2016年3月17日ダウンロード. <http://homepage3.nifty.com/newmiurapage/shisakuban.html>
- 三浦孝・亙理陽一（編）（2014）.『Trinity English Series Book 3 指導書・ワークシート集』2016年3月17日ダウンロード. <http://homepage3.nifty.com/newmiurapage/shisakuban.html>
- 文部科学省（2009）.「高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編」. 2015年3月1日ダウンロード. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf
- 文部科学省（2013）.「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について. 2015年12月6日ダウンロード. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm
- 山本孝次・柳田綾（編）（2014）.「The Test」, 「Is There a Santa Claus?—Virginia's Letter」『Trinity English Series Book 2』2016年3月17日ダウンロード. <http://homepage3.nifty.com/newmiurapage/shisakuban.html>
- 山本孝次・柳田綾（編）（2014）.『Trinity English Series Book 2 指導書・ワークシート集』2016年3月17日ダウンロード. <http://homepage3.nifty.com/newmiurapage/shisakuban.html>